

原著

幼児の自己有能感を育む保育についての一考察

長谷 秀 揮 *

A Study of preschool education in a nursery school about children's self competence

Hideki Hase

本稿の目的は、幼児の自信を幼児の内面に育むべき自己有能感ととらえ、保育を受ける幼児の自己有能感に着目し、それを育むことを大切にする保育の在り方について考察することである。そこで、保育園の5歳児クラスに入り参与観察を行い、実際の保育において子どもたちが自己有能感を育み、そして高め深めていくことが出来る保育者のかかわりと援助及び配慮についてその実際を把握。その中で特徴的なエピソードを収集し、また幼児の状況について聞き取り調査を実施した。さらに担任保育士2名に併せて半構造化面接調査を実施して分析及び考察を行った。結果、保育者の一人一人の幼児の状況に応じた意識的なかかわりと援助の重要性が明らかになった。また保育者のプラスのストロークは幼児にとって有効であり、幼児の自己有能感を高めることが明らかになった。そして5歳児クラスの大半の子どもが、それぞれ一層自信を深め主体的かつ意欲的に遊び生活する姿が見られた。

Key words: 幼児の自信、自己有能感、保育者のかかわり、プラスのストローク

1. はじめに

子どもの教育や保育また子育てにおいては、一人一人の子どもの成長発達のどの段階においてもいわゆる自己肯定感をしっかりともち、意欲や積極性に溢れ、かつ自分自身に自信をもった、そういった子どもに育てていくことが心理的な側面から捉えるならば、大切であるといえる。特に、現代日本の青少年の「自信の無さ」を考える時、幼児期にその基礎を築くことは必要なことであり、もちろん幼児教育や保育の現場においても、それは当然のことながら大切にされているといえるが、一人一人の子どもに対する必要な援助と配慮に関する実際の状況はどうであろうか。場合によっては、園や保育者の状況により様々な行事や保育者の設定した課題に取り組むことに“追われて”しまい、一人一人の子どもの心を育てることにしっかりと向き合っていないような状況も無きにしもあらずではないだろうか。

鯨岡は、このことについて、『保育現場は子ども

一人ひとりを主体的に受け止めることがおろそかになって、保育者の「させる」働きかけや集団として動かす働きかけが必要以上に強くなっているようにみえます』と、指摘している¹⁾が、この点について自分自身のかつての保育実践を振り返ってみるならば、大いに反省させられるところであることは否めない。また保育の現場では、保育者からみて何となく気になる子どもや、発達のアンバランスな子どもや、発達障害の可能性が疑われる子どもといった、いわゆる“気にかかる子ども”の増加が顕著となってきた状況がある。そういった子どもの保育をどのようにすすめていくか考える際には、一人一人子どもを大切にする保育のあり方および現状について、園全体や学年やクラスでの、そして個々の保育者の評価・反省が十分に行われること、またそれが日々の実践に反映され活かされていくことが求められる。

子どもは、乳児期から幼児期へと成長するにつれて身の回りの様々なことに興味関心を示し、大人に見守られながら自発的に周囲の環境に関わっていき、その中で様々な知識や能力を獲得し、生

* 四條畷学園短期大学 保育学科

きる力の土台を身につけていくといえる。また幼児は、保育園や幼稚園においては、保育者に見守られながら集団生活を送り、色々な遊びを友達と一緒に楽しむ中で経験を積み重ね、そして達成感や満足感を味わい次第に自信を深めていく。園において最年長である就学前の5歳児クラスの子どもたちは、自らの生活や遊びを創造的に、また課題的に展開していくことが出来るようになる時期でもあり、日々の生活や遊びを通じて達成感や満足感を味わうことを日常的に積み重ね、まさに自信に満ち、ますます充実した毎日を送ることが出来るようになっていく。それ故に、一人一人の子どもの状況に応じて、生活や遊びの中でしっかりと充実感や満足感が味わえるように、保育者はそれぞれの子どもに対して十分に援助及び配慮することが求められる。そのことにより、年長児としてふさわしい生活と遊びを一層充実させて、子どもたちは、それぞれが自身の自己肯定感を確固たるものにし、また自分自身に対する自信（自己有能感）をさらに深めていくことが出来るのだといえる。

幼児期において、そのようにして獲得された自信は、生きる力の基盤、基礎となり、学童期以降においても自分自身で積極的かつ意欲的な態度に満ちた生活を主体的に創りだす土台になると考えられる。

2. 研究の目的

保育園における5歳児クラスの子ども、すなわち就学前の満5歳から満6歳の幼児が、園での生活と遊びの中で自ら育み、また保育者による配慮に満ちたかかわりと援助により育まれる自信を、子ども自身の内面の有能感と捉え、保育園での実際の保育を通して一人一人の子どもの自己有能感が育まれていくことに着目した。そして日々の保育の取り組みの中で、幼児が自己有能感を育てていく様子をつかみ、そしてまた保育者のかかわりと援助につなげて捉えていくことを研究の目的とした。

3. 研究の方法

対象：大阪市近郊A市B保育園の保育士23名
及び5歳児40名
期間：平成22年10月～平成23年3月

研究の概要：担任保育士のサポート及び保育補助職員として、5歳児クラスに週2～3回の頻度で入りクラスの状況や一人一人の子どもたちの様子、及び保育者のかかわりや援助、また配慮を参与観察及び実際の保育補助を通して観察し把握した。同時に日々の保育において、子どもたちが自己有能感（自信）を育み深めていくことができるような保育者のかかわりと援助、そして配慮についてクラス担任と省察し検討を加えた。また、自己有能感（有能感の尺度：桜井1987、を活用し①学習領域、②社会領域、③運動領域、④自己価値の4つの領域うち、自己価値の領域を活用）についての聞き取り調査（質問形式）を約1カ月半から2カ月の間隔で、計3回実施して子どもたちの自己有能感（自信）に関する状況をつかみ保育にフィードバックし、その際の個別のかかわりの中で特徴的なエピソードを収集した。そして担任保育士には、幼児の自己有能感及び行事に関する半構造化面接調査を併せて実施した。

4. 結果と考察

（1）聞き取り調査より

子どもたちの自己有能感に関する状況の把握は、有能感尺度（桜井1987、前述）を用いて、クラスにおいて生活や遊びの中で子どもと交流し触れ合いながら、個々の子どもの名前を覚えて呼び合うなど、子どもとのかかわりを十分にもち子どもとの関係がある程度出来てから聞き取りの形で実施した。

表1 有能感尺度(自己価値)の記述統計

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
1回目11月	22	39	30.8	3.97
2回目1月	23	38	31.2	3.87
3回目2月	26	39	33.0	3.43
	項目数10	MAX40		

（項目例「1. 自分に自信がある」）

各回の聞き取り（第1回目11月中旬、第2回目1月上旬、第3回目2月下旬に実施）の結果を受けて、クラスの一人一人の子どもの状況の確認、及び捉えなoshiを担任保育士2名と協働でおこない、日々の保育の中で個別のかかわりを意識的に持ち、自己有能感を高める為の、意図的なかかわりや援助を特に必要とする状況にあると考えられる子どもを、各回ともにクラス全体から5～6人絞り込

んだ。その際の視点として、結果の最小値の該当児はもちろんであるが、2名の担任保育士のそれぞれの視点と、またクラス全体からみて捉える視点、筆者の視点とを複合させて、総合的な観点から個別のかかわりや援助が必要であると考えられる子どもに焦点をあわせることとした。

そして、保育士が保育の中で子どもたちにごく日常的に行っている朝夕の挨拶を含め、握手をしたり、身体をさすったり、なでたりなどのスキンシップを図ったり、そして励ましたり、ほめたり等して、「プラスのストローク」²⁾を上述の5～6人の該当児に対して、同じく3名で協働してより意識的に増やして一人一人の子どもに、より丁寧かつ細やかにかかわり援助していくようにした。

(2) エピソードより

エピソード1 『おもろいな』

<背景>

12月には子どもたちの大好きなサンタクロースが登場するクリスマス会があり、5歳児クラスはミニ音楽会形式で歌と楽器演奏を披露することが恒例になっている。歌も楽器も4月から、あるいはさらに遡って、年少、年中の時から経験の積み重ねがあるので、クラスの子どもたちは音楽会に向けての取り組みにすすんで参加している。

A君は、3歳児クラスからの入園で3年目になる。父ひとり、子ひとりの父子家庭で、送り迎えは祖父母がしている。父親はとても厳格で、A君が赤ちゃんのときから厳しく叱ったり、時には体罰を加えたりすることもある。それをごく当然のしつけであると考えている。祖父も父親と同様に厳格なタイプでA君に手をあげることも日常的である。祖母は母親がいないこともあって不憫に思っているが、祖父や父親には、何も言えないようである。A君は自分の気持ちや意志をうまく言葉で表現することができずに、すぐに手が出てしまい、入園当初から何かとトラブルが多い。5歳児になってからも友だちとの衝突が絶えず、男の子同士でのぶつかり合いでは、互いに身体も大きくなり力も強くなってきているので、相手に怪我をさせてしまうことも度々で、保護者対応を含めて担任はとても苦慮している。園長からのアドバイスもあり、出来る限りA君の気持ちを受けとめるように、マンツーマンで話を聞いたり、時には膝に乗せて

絵本を読んだりして、スキンシップを図るようにも心掛けている。

<エピソード>

12月に入って、サンタクロースに「お手紙」を書いたり、クリスマスの曲に合わせて体操をしたり、クリスマスの絵本を読んだりして、子どもたちのクリスマスへの期待と、クリスマス音楽会へ向けての取り組みの保育の中での割合が、次第に大きくなってきていて、子どもたちの気持ちも何となくウキウキと弾んできている。特に女兒の“おしゃま”なグループでは、クリスマスプレゼントに何を頼むのかまた頼んだのかの話題でもちきりである。

給食を食べ終わって、片付けも済んだ5歳児クラスの子どもたちは、保育室の隣のプレイルームで自由に楽器を鳴らして遊んでいる。いつものようにおかわりもして、給食を早く食べ終わったA君は、プレイルームで木琴を鳴らしていた。筆者も「強くてたくと、うるさいね…」と、声を掛けながら、隣で同じように木琴を鳴らしていた時に、「…これっておもろいなあ〜。先生(担任)と鳴らすとおもろいわ。ピタッとくるとメチャおもしろい…バラバラと鳴らすと、うるさいけどなあ。」A君なりに色々な楽器をクラスの皆で合奏することの、楽しさを感じているようである。担任の合図や指揮で、皆の呼吸が合うとおもしろい(=楽しい)と、感じている様子である。そして、それぞれが自分勝手に鳴らすと、うるさいと感じているようである。

筆者は、「ほんまやねえ!…A君は、楽器も音楽も好きやから、ピタッときたら面白いってわかるんやねえ!すごいなあ〜」と応えると、A君は少しうれしそうな表情で、「うん、お父さんとカラオケ行ったことがあるし、車でCDかけて歌うしな…」と、さらに話を続けてくれた。少し心を開いてくれたように感じたので「先生(筆者)も同じやで。車で歌うし、お風呂でも歌うで。歌も音楽も好きやから楽器鳴らすと面白いし楽しいわ。A君と一緒にやで」と話すと、すかさずA君は、「お父さんもおんなじや! お風呂に入ったらいつも歌ってるわ」と、話してくれたので、こちらもすぐに「そうなんや〜!ほんまやなあ〜!同じやなあ〜、ははは」と笑い返す。A君も少し照れたような様子で、「は

はは！…」と笑顔を返した。その後、しばらく木琴を鳴らすと飽きてしまったのか、パチを置いて保育室に帰り、ブロックで遊んでいる男の子たちの隣で同じようにブロックで遊び始めた。

<考察>

A君は、クラスの中では男の子の友だちからも、すぐに手が出て乱暴だからという理由で疎ましく思われているところがあり、どちらかという一人で遊んでいることが多い。A君の気持ちを、ほんの少しでも寄り添い受け止めて理解できればと、かかわるきっかけを探っていたところであったが、筆者とお父さんのイメージとが繋がるからか、ぶっきらぼうながらも、自分から話をしてくれてうれしく感じた。A君を少し身近に捉えることができたように思った。

友だちと仲良くしようと考えているなら、生活や遊びの中で友だちと思いや意図がぶつかっても手を出さないことが大切である事は、A君もよく分かっていることではあるのだが、なかなか自己抑制できないことに自分でも、どうしてよいのかわからず持て余している様子が感じられる。友だちとのぶつかり合いの場面で保育者が仲立ちになって、粘り強く繰り返し話し伝えていくことが今後必要であろう。手を出すことは父親の影響を強く受けた、A君なりの自己主張の方法であることは確かだが、社会的には通用しないし適当ではないことを理解できるように、A君に関わる全ての保育者が意思統一して状況を確認しながらフォローしていくことが大切になる。

エピソード2『わたし、どうしよう』

<背景>

5、6歳になると、運動機能の成長発達と共に縄跳びが跳べるようになり、練習次第でスムーズに、またリズムカルに跳べるようになる子どもが増えるが、保育園では年長児の秋を過ぎる頃になると、多くの幼児が「前跳び」なら簡単に跳べるようになる。特に女兒は、男児と比べると比較的粘り強く挑戦し、かつ繰り返し練習することもあり、上手く跳ぶことができる子が多い。しかし、Bさんは少し肥満気味であることもあってか縄跳びはかなり苦手なようで、「1回跳び」なら何とか飛べるのだが、縄を連続して回して跳ぶいわゆる、「連続

跳び」ができない。Bさんは、一人っ子で、母親は、恰幅のよい身体つきで、Bさんもよく似た身体つきをしている。両親は、自宅でうどん屋を営んでいて、いつも忙しく店で働いていることもあり、Bさんはあまり構ってもらえてないようで、夕食を一人で食べることが多いなど忙しい時間帯はいわゆる“放ったらかし状態”になることも多い様子である。その為、夕方から夜にかけてスナック菓子を好きなだけ食べながら、テレビやビデオを一人で見て寂しく過ごす、といったようなことも多いとのことである。

<エピソード>

秋から冬にかけて、保育園では毎朝ミニマラソンと乾布摩擦を行っている。マラソンと言っても実際は、ごく軽いジョギングであり、小さなクラスの子どもたちは、園庭を2、3周するくらいであるが、幼児クラス（3、4、5歳組）は、担任保育士と一緒に、近くの神社まで車の通らない農道を走って往復するジョギングに全員が参加する。Bさんは、走ることは好きなようで、「いちに！いちに！」と、いつも元気よく声を出しながら走っている。筆者と一緒に走りながら「Bさん元気がいいね！スピードがあるよ」と声をかけると、少しはにかみながら「うん！」とうなずき笑顔を返してくれる。マラソンから帰ってうがいをした後、園庭で縄跳びをすることになった時に、「なわとびも、がんばろうね！」と、筆者がBさんに声をかけると、「…マラソンはいいけど、なわとびは…いやだなあ…」と、元気のない返事である。縄跳びに、かなり苦手意識をもっている様子である。筆者は、「大丈夫だよ、練習すればきっと上手くなるよ！」と、声をかけて励ました。手に縄を持ってBさんは、「縄跳び、まだ1回1回しか跳べないの…」と、“ベソをかいた”ような力のない声で、小さくつぶやいた。そして、さらに「わたし、どうしよう…」と、とても自信なさそうな様子である。筆者は、「大丈夫だよ。みんな同じだよ。最初はみんな、1回跳びしかできないよ」と声をかけ、様子を見守った。確かに一回跳びしか出来ないが、「少しずつ手を早く回すようにしていくと、きっと連続跳びが出来るようになるからね！」と、励まして「ファイト！」と、さらに声をかけると、Bさんは、ぎこちない跳び方ではあるが、「○△ちゃんみたいに、いっぱ

い跳べたらいいのになあ…」とか、「○△ちゃんみたいに、いっぱい跳びたいな…」などと、つぶやきながらその後も繰り返し、連続跳びの練習を続けた。

<考察>

Bさんは、少し肥満気味でもあり運動があまり得意ではないという自分自身のことについて、ある程度は客観的に分かっている様子である。そして縄跳びを何とか上手く跳びたい、友だちのように連続して跳べるようになりたい、という気持ちは強く持っているようである。しかし、努力してもなかなか連続して跳べるようには上手くならないので、自分でももどかしい気持があるのだろう。そのような気持ちのゆらぎのなかで、「わたし、どうしよう…」（＝「どうしたら、よいのだろうか？」）と、いうつぶやきが、口をついて出てきたのではないだろうか。

自分の身体つきや運動能力について、一定の自己認識は有り、それを乗り越えていかなければ縄跳びが上達しないことを「連続とび」を練習する中で、なお一層強く感じとっているのではないかと思われる。乗り越えるために必要な力を、何とかしたいと思って「… どうしよう …」という、自問の言葉が出てきたのかもしれない。Bさんは、自分でも何とかしなければと感じ、あれこれと考えているのだが、どうすれば良いのか判らず停滞した思いを抱いて、鬱々としてすっきりとしない状況にあると考えられる。子どもなりに悩みを抱えて現在の自分の在り様について、あれこれと思いを廻らせているBさんの状況が、この「どうしよう …」という、つぶやきによってクッキリと浮かびあがってきたように、筆者は感じた。人から見れば小さなことだが、当人にとってはとても大きな乗り越えるべき壁にぶつかって葛藤状態の中で行きつ戻りつしているBさんに、思わず「ファイト！」とエールを贈りたくなり、その後も保育室から戸外出たら、まずはBさんの姿を探した。

エピソード3 『むりやわ…』

<背景>

1月も中旬に入ってから、運動会と並んで大きな行事である翌月の「生活発表会」に向けての取り組みがクラス（5歳児）でも保育の中心になっ

てきたこともあり、一人一人の子どもの様子に普段にも増して注意し、担任保育士2名と筆者とで、子どもたちが、満足感や充実感を生活発表会の取り組みの中で味わうことが出来るように十分に配慮しながら、それぞれの子どもの関わりを深めていくようにした。

C君には小学2年生の兄がいて、歳も近く二人だけの兄弟であるので、とても仲が良いようである。またC君は、次男である為に兄や家族の様子や、兄が色々なことで失敗して母親や父親に叱られたこと、等々をよく観ていて、家庭内でうまく立ち回ったり、何かしでかしても言い訳を上手にしたりして、いわゆる要領が良いところがある。そして、自分より小さな子どもには優しく接することができたり、飼育小動物の世話を丁寧にしたりして、気持ちの優しいところもあるので、友だちとの関係も特に問題はなく、クラスの中でも落ちついて生活し遊んでいる様子が見受けられる。しかし、少し引っ込み思案で消極的なところがあり、また、いわゆる食わず嫌いの傾向があるため、担任保育士も、C君にどのようにして意欲や積極性を、また自信をつけさせていったらよいのだろうか、と、思案しながらかかっているところである。

<エピソード>

年長さんになると、コマ回しに挑戦する子どもが随分とふえてくる。特に男の子は「よし、僕もやってやろう！まわしてやろう！」と思っている子が多いようである。年中さんや年少さんも、カッコよくポーズを決めて、難しい紐のコマを回す年長のお兄さんに憧れのまなざしを注ぐ様子も見られる。

C君も今朝もまた、担任保育士に手を添えてもらいながら紐を巻いて、「こう？」と、コマを右手に持ち投げて回す構えをとり、担任と一緒にやってみようとする。そして「えいっ！」と、コマを手から離して投げてみるが、うまく回らない。紐がほつれて、コマに回転を与えるようにはならないのである。担任は、「自分で何回もやってみるんやで、また一緒にやってあげるから…」と、他の子どもの補助に移りその場を離れた。筆者は、「C君、先生と一緒にやってみよか？」と、声をかけると「うん…でも、お兄ちゃんでもむづかしいから…」と、気持ちはかなり萎えてしまっている様子であ

る。筆者は、「そうかあ～、難しいもんなあ～…」と、言葉を返す。C君は、「…でも、お兄ちゃんも（保育園で）練習して、回せるようになったって（話していたし）…」なかなか気持ちは揺れて、どうしたらよいのかわからない様子であるが、筆者がコマを手にとって紐を巻くのを見ていると、「…ひもが、なあ…」とつぶやく。筆者は、「ここに紐をかける時に、力があるから気を付けて巻くんや。コマを左手でしっかりと持って、紐をぎゅって引っ張りながら…」、筆者、「そう！そう！」と、上手く巻けていることを、うなづきながら励まし、コマを握ったC君の右手を上から自分の手を、かぶせるようにして添えながら、投げ回すポーズをとっているC君と一緒に、右腕をふってコマを地面に投げた。コマは、土の上に何とか上手く着地して、よろよろとしながらも回っていた。「やったー！」、思わず二人で喜び合った。C君は、「自分でやる」と止まったコマをさっと拾い上げて、すぐに自分で紐をコマに巻きつけようとしていた。

<背景>

伝承的な遊びの中でも、お正月遊びとされている「風揚げ」や、「羽根突き」と違って、コマ回しは、「おはじき」や、「お手玉」と同じように現代の子どもたちには、かなりマイナーでなじみの薄い遊びになっている。しかし、保育園や幼稚園においては、異年齢集団による、いわゆる群れ遊びや遊びの伝承が可能であることもあって、コマ回しは現在でも多くの園で取り組まれている。紐のコマを上手く回す為には、手指の巧緻性、集中力、全身の調整力、などが必要となってくる。とりわけ紐で回すコマは、例えば「竹馬」や、「一輪車」に乗って歩き動けるようになる為には一定の技術やコツの習得が必ず必要になるように、ある程度の期間、その習得の為に試行を重ねる、つまり練習することが必要になる。

C君の気持ちは、「むりやわ…」という独白に凝縮されているように思われる。兄でも難しいくらいなのだから、無理からぬことである。しかし、コマを回すことへの憧れは強く心の中にあるので、筆者に手を添えてもらって補助を受けながら回してみるとやはり「自分で」回したくなって、回せるようになりたいという気持ちが膨らんで、コマをサッと拾い上げて、紐を巻こうとしたと思われ

る。

自分もコマを回すことが出来るようになることによって、一歩でも兄に近づきたい、小学生の兄のようになりたい、つまり大きくなりたい、追いつきたいという気持ちの発露であったように思われる。モデルとして身近な兄を捉え、その兄に自分の将来像を重ねて、懸命に目の前の課題に取り組もうとしているC君のひたむきさ、心のうねりを感じることが出来たように思う。

エピソード4 『ハラハラする』

<背景>

2月には、運動会と並んで大きな行事である「生活発表会」がある。子どもたちが日頃の保育の中で培ったこと、つまり保育園での生活や遊びの中で身に付けたことや学んだことを発表し子どもたち一人ひとりが充実感や満足感を味わうことが出来るように、担任も大いに心をくだき、日々精一杯充実させながらこの時期の保育を子どもたちと共に創り出している。また、クラス全体への目配りと配慮はもちろんであるが、日頃からあまり目立たないような子どもたちについて、それぞれ元気の良さや様子に特に注意し、関わり方にも十分配慮しながら保育をすすめている。

Dさんは、落ち着きがなく多動気味で、そして自信のなさが特徴的な女の子である。はっきりと自分の意見を言えないところがあり、生活でも遊びにおいても、いつも人の後からついて行って行動して、自分が前面に出るような言動は、全くといってよいほど見られない。そして今あっちの友だちと仲良く遊んでいたと思ったら、すぐにこっちの友だちと親しげに遊んだりして、気分のムラと調子がよいところがあり、その為かクラスの女の子たちから何となく敬遠され、よそよそしくされている様なところがみられる。

<エピソード>

Dさんは、「王様の耳はロバの耳」の劇遊びの中で王様の髪を刈る床屋の役を友だちと二人で一緒にしている。床屋は、王様の耳の秘密を口外したら死刑にするぞと、王様言われているのだが、とうとう我慢ができなくなり、自分で穴を掘ってその穴の中に向かって大きな声で「王様の耳はロバの耳～！」と、叫んでしまうのである。午前中に

劇遊びの部分遊びをした日の午後のおやつ時間に、Dさんに「王様の耳はロバの耳の遊びは、おもしろい？」と、筆者が尋ねると「おもしろ〜い」と応える。さらに「どこが、おもしろいの？」と聞くと、「... う〜ん ...」と、少し考えた後で、「... 穴に（向かって）、王様の耳はロバの耳っていうのがおもしろいよねえ〜」と、隣の席の友だちに同意を求めながら応える。「そうなんや〜！ロバの耳って叫ぶところがおもしろいんや〜」と、筆者が繰り返すと、隣の席から「そう、ドキドキするからねえ」と、友だちが応えた。すると、Dさんも「ドキドキするから」と友だちと同じように応える。友だちは「そうそう」とあいづちをうった。すると、しばらく間をおいて、Dさんはさらに、「... ハラハラするからねえ ...」と、つぶやいた。その時、筆者は、Dさんが自分の言葉で自分の気持ちを、そのままストレートに表わしたように感じた。

<考察>

ごっこ遊びやお話遊び、また劇遊びは、「子どもの想像力や感性を育み伸長する遊びであるということが出来る」³⁾。また、話（＝ストーリー）の中に気持ちが入り込んで、そして劇遊びの役になりきって十分に遊びこむことを通して、お話の中の様々な要素（＝エッセンス）を子どもたちは、随伴的に全身で学び吸収し成長していくことが見受けられる。

Dさんも、クラスの他の子どもたちと同じようにこの度の生活発表会に向けた取り組みにおける劇遊びの様々な遊びの中で、自分の役つまり王様の髪を刈る床屋の役になりきり、繰り返し遊びこむことによって、床屋の仕事についての理解や床屋らしい表現をはじめ、床屋の心の動きや気持ち、また王様との関係や王様自身の気持ち、等様々なことを学びとり成長したように考えられる。その中で特に、いわゆる遊びの面白さの要素を凝縮した三つの、「ハラハラ」、「ドキドキ」、「ワクワク」と、という言葉の一つを、Dさんが自ら使い、劇遊びの床屋の役の面白さを自分なりに表現して、筆者に伝えようとしていたことに着目したいと思う。

エピソード5 『つかれたわ』

<背景>

園長が、生活発表会の挨拶の中で、保護者に子

どもを今日は家でもしっかりとほめてやってくださいと、声を掛けたこともあり、子どもたちは、お母さんやお父さんに、「大きなはっきりした声で、頑張ったねと、お母さんにほめてもらった」とか、「友だちと力を合わせて頑張ったねと、お父さんにほめてもらったよ」と、発表会の翌日の朝、園に来ると嬉しそうに事務室の園長先生や副園長先生、そして担任保育士に“報告”していた。子どもたちにとっては、やはりお母さんとお父さんにほめてもらうことが一番嬉しいようである。中には両親と、両親のそれぞれの両親、つまり4人の祖父母にほめてもらって得意満面の様子で報告するツワモノもいた。家で家族にほめてもらった様子を詳しく報告することによって、さらに園で先生方にほめてもらえることもあり、生活発表会以後しばらくの間、子どもたちは「きいて！きいて！」と、競って話をするような状況であった。

<エピソード>

生活発表会が終って3、4日経ってからのことである。少々荒っぽいところはあるが、いつも元気いっぱいE君が、発表会での楽しかった劇遊び（『泣いた赤鬼』）のことを自由画帳に書きながら、「あのな先生（筆者）、ばくな発表会で青オニをしたんやで。それでな、お母さんもお父さんも、頑張ったなって、いっぱいほめてくれてんで...」、筆者が「それは、よかったね。うれしかったよね」と応えると、E君は「でもな、日曜日にな、おじいちゃんどこにいて、青鬼のことを話ししたらな、鬼は悪いからよくないなって、いうんやで〜！？」、「それで、おじいちゃんに、村人には悪いことをするけれども、青鬼は赤鬼のために、わざと悪いことをするんやでって、教えてあげてん」、「それで、やっとなさは青鬼は、ほんとは、いい鬼やとわかってくれてんで〜」、「なかなか、わかってくれへんかったから、たいへんやったわ〜」と、さも大変だったという表情をしながら、「青オニをやるだけでもしんどかったのに、おじいちゃんに（『泣いた赤鬼』の）お話を教えたったから、ほんまつかれたわ！」

<考察>

子どもなりに、プレッシャーやしんどさを感じていた青鬼の役を、生活発表会でやりきった充実感、

達成感、そして満足感といったものが、E君の話す口調や表情から筆者に伝わってきて、「泣いた赤鬼」の劇遊びで自分の役になりきって遊ぶことを通して、E君は、随分と成長したなと強く感じた。担任保育士がこの話を、劇遊びの題材として取り上げた理由の一つとして、この話のテーマである友だちへの思いやりや、相手に対する優しさをクラスの子どもたちを感じ取って欲しい、掴み取って欲しいという担任の願いがあったからだと考えられる。そこのところを、E君は、おじいちゃんへの「泣いた赤鬼」のストーリーと内容についての説明を、“しんどいながらもやりきった”ということを通して、担任の願いなり、ねらいなりをしっかりと受け取っている、感じ掴み取っている、ということを示してくれたのではないかと感じた。

<総合考察>

今回エピソードを取り上げた子どもたちは、それぞれ自己有能感が顕著に低い傾向があり、また担任から見て各々何らかの側面において気にかかる子どもである。

子どもは、誰しも発達の途上に在る故に、それぞれ脆さや弱さを抱えている。様々な形で発達の節目や、成長発達の流れの中でそれが発現し、身近な人との関係性の中で問題として認識され、時に保育者の対応を必要とすることが起こりうる。保育現場において、いわゆる“気にかかる子ども”の増加は、ここ数年間においてとりわけ顕著であるが、その“気にかかり様”はまさに多種多様であり、看過してはならない重大な問題を内包しているケースもあり、園において保育者は自らの専門性と経験に基づき最大限の努力をしているが、その問題の多様性ゆえに対応に苦慮している状況がある。具体的には、各々の子どもの1年後、2年後また5年後を見通しながら日々の保育の中で工夫し、配慮しながら出来ることを個人で、また保育者集団で協働して、そして園長及びその他の職員と連携して取り組んでいるのが現状である。加えて、多様な家庭事情の中で諸々の問題を抱えた保護者に養育されている子どもが複数名以上在籍するクラスの担任保育士は、保護者対応、すなわち保護者への支援も「一人一人の保護者の状況を踏まえ、子どもと保護者の安定した関係に配慮して、保護者の養育力の向上に資するよう、適切に支援

すること」⁴⁾が必要になり、その負担は過重であると言わざるを得ない実状がある。

子どもを真ん中にして、保護者と保育者が“育む者”あるいは、“育てる者”として手をつなぐ為に担任以外のマンパワーあるいはリソースとしてフリー保育士や主任保育士、及び筆者のような職員をうまく活用して“気にかかる子ども”のフォローに、プラスアルファすることは有効な手立てであろう。このようなことは園長の判断、及び裁量によるところが大きい。子どもたちの状況とクラス担任の重責とを深く認識することで、今回のように可能になるといえよう。園長以下、全ての職員が自らの専門性と経験を活かして、一人一人の子どもの為に今可能な、出来る手立てを最大限行うという共通認識が土壌となっている園ならではのチーム保育の一例といえるのではないだろうか。

(3) 半構造化面接調査より

[1] F 保育士 <29 歳、女性、保育士経験年数 8 年>

①子どもの自己有能感（自信）について

- ・子どもにはまず、自分は今の自分でいい。ありのままの自分でいいんだ、というような自己肯定感をしっかりと持って欲しいと思う。
- ・子どもをよくみていると、家庭で母親や父親にひどく叱られた時等には、やはり保育園に来てても何処となくボーッとしていたり、元気がない様子が見受けられたりすることがある。そんな時は、自分のことを肯定的と考えられないような状態になっているように思う。
- ・何より子どもが、母親と父親に愛され、大切にされているという精神的な基盤、土台が一番大切であるように思う。
- ・子どもたちそれぞれが、自信と誇りを持って小学校に入学して欲しいと強く願っています。その為に保育士として言葉掛けも含めて、色々と配慮しなければならないこともよく分かっています。
- ・保育士としての自分に自信が無く、まだまだ勉強しないといけないと思っています。

②クラスの子どもの育ちについて

- ・子どもの表面上の様子や行動では、とらえきれない内面が、自己有能感（自信）についての子どもへの聞き取り調査によって、くっきりと浮かび上がり、改めて子どもをとらえ直すことが出来たように思う。

- ・それぞれの子どもに対するかかわりや援助や配慮を、組み立てたり変更したりすることが今回はできてよかったと思う。
- ・子どもの見方や捉え方も広くなりまた深くなったので、良かったと思う。自分自身もそのことによって、保育士として一つバージョンアップできたように思っている
- ・今回の生活発表会では、クラスの大多数の子どもが成長したと、私は実感している。
- ・特に3人（担任と筆者）でチームワークよく、家庭に問題のある子や、友だち関係の中で落ち込んでしまった子や、気になる子に協力して関わって、フォロー出来たので良かったと思う。

③行事について

- ・毎年のことではあるが、どうしても追われるような切迫感を、行事になると感じてしまう。特に今年は年長組の担任ということもあり、とても強くそれを感じた。
- ・クラスの子どもたち皆を引っ張ったり、全体を上手くまとめたり、というようにクラス全体を意識して、保育することが前面に出てしまうことがある。
- ・いつの間にか、一人一人の子どもに目をしっかりと向ける余裕がなくなってしまう。反省しなきゃならないところです。
- ・5歳児クラスでは、劇遊びをクラスみんなで作り上げていくことが一つのねらいになるが、子どもを集団としてとらえる際にも、声の大きい子どもにどうしても目を向けて注目してしまい、声の小さな子どもの考えや意見は、仕方なく埋もれてしまうようになってしまう。
- ・行事を通して、子どもたちが様々な経験や活動を積み重ねて大きく育ち、さらにクラス全体としてもまとまっていくことの手ごたえは感じる。
- ・一人一人の子どもに目を向けると、あまりその手ごたえを感じることができなかったり、何となくやったという感じだったり、また、それほど満足感や達成感を感じていないという様子の子どももいて、これでよかったのかと、とても反省させられる。

[2] G 保育士＜25歳、女性、保育士経験年数4年＞

①子どもの自己有能感（自信）について

- ・私は、子どもはいるだけで尊いし、両親とそして社会の宝物だと考えている。そして子どもにかか

わることで自分も元気をもらっていると、毎日保育をしていて実感している。

- ・子どもが笑顔で元気に遊べるように、園では、いつも笑顔で子どもたちに向き合い、そして見守っているように心がけている。
- ・子どもに、あなたは両親にとっても、先生にとっても、とても大切な存在なのよ、ということをつも子どもに伝えていきたいと考えている。
- ・このクラスの子どもたちが好きだから、子どもたちの為にできることは何でもやってあげたいと思うし、このクラスでも4月からそうやってきたと自分なりに思っている。
- ・子どもとしっかりと遊んで、よくほめて、いっぱい自信をつけさせたいと、これからもそうしたいと思っている。

②クラスの子どもの育ちについて

- ・今回は、初めての5歳児クラス担任だったこともあり、自分の経験不足や力量不足、また行事や日々の保育への準備不足も強く感じた。
- ・特に、ピアノは懸命に努力したが、もともとあまり得意でないで、今でも子どもたちに申し訳ないという思いが強くある。
- ・ピアノについては、練習を重ねて色々な歌をクラスで歌ってきたので、子どもたちと一緒に成長できたかな、という思いも若干ある。
- ・当番活動やグループ活動を通しての、集団づくりも考えて保育を行っている。
- ・一人ひとりの子どもとのかかわりは、どうしても手のかかる子どもや問題のある子に、偏りがちになってしまっていた。
- ・この度は、先生（筆者）が補助をして下さったので、一人一人に随分と丁寧に関わることが出来てクラスの子どもたちにとって、とても良かったと思うし、今までの私の保育の反省点や足りないところが良く判った気がします。

③行事について

- ・行事については、計画を立てる能力も、実際に取り組みを進める指導力や技術も足りず、もっと勉強しないとダメなと、自分自身強く思っています。
- ・特に、遊びの計画づくりが苦手で、そして計画的に、先の見通しを持って取り組むことがなかなかできなくて、おしりに火がつかないといけないので、いつも困ってしまいます。
- ・やらなくてはならないことは、一生懸命にやって

はいるが先取りしてやることはできない性格であると、自分自身でも思っています。

＜考察＞

F 保育士は、保護者の子どもに対する愛情の大切さを、子どもの自己有能感が育まれる為の土台として強調しているが、ご自分の子どもさんが幼児であることから母親として自らの子育てを通しての実感からの発露であり、大いに共感できる場所である。また、自分自身の保育士としての力量や能力についての自己評価は低い、園長の信頼が厚く、同僚や保護者にも頼りにされているところから、そういった客観的な評価を拠り所として、さらに自信を持って子どもたちにかかわり、必要な援助や配慮をおこなうことにより、相関的に子どもたちの自信も育まれていくように思われる。

「保育園の中ではいつも笑顔で、そして子どもたちから目を離さずに過ごすようにしている」との、G 保育士の述懐がとても印象に残った。自分自身の日常生活の中では、時にはイライラしたり精神的に不安定になったりすることもあると思われるが、保育園で子どもの前に立ち、また子どもと接する時には、保育士としての自分の使命と役割をきちんと果たそうとする自覚と姿勢をそこに感じたからである。

子どもは、あたたかなまなざしで見守られていると、元気に遊び、意欲的に色々なことに挑戦していくということを、G 保育士は経験知として理解しているのであろう。自己有能感は、そしてまた満足感や達成感は、子どもが生き生きと主体的、意欲的に活動してこそ味わい獲得することができるものであるから、その為にまず必要な保育者の援助と配慮の基本が、G 保育士の述懐に示されているといえよう。

クラスの子どもの育ちについては、個別に一人一人の子どもに丁寧かつ細やかにかかわり、必要な援助や配慮を行うことは、やはり5歳児という年齢的なこともあり、日常的にはあまり出来ていなかったとの反省が両者からでた。乳児クラスなら子どもの発達段階から、必然的に個別に関わることが必要になり、保育士も人数が多く手がある為、クラス全体の動きや保育の流れから離れて一人一人に十分手を掛けることが出来るが、幼児組でそれは難しいので、担任が意識的に個別の

子どもへのかかわりを持つように配慮することが、今後も求められる。

行事については、保育園全体に関わることであるため、年度末の年間反省会や、次年度の年間計画検討会などの機会を捉えて評価反省と平行して問題提起し、行事の精選やそれぞれの行事の意義やねらいの再確認や、取り組み方などについての議論が必要であると思われる。特に年長児クラスは、行事数も内容も、歯止めをどこかで掛けないと、年々歳々どうしても盛りだくさんとなり、子どもも保育士もオーバーワーク気味になるのが常なので、注意が必要であろう。現担任が前もって園長や主任、そして次年度の担任に今年度の問題点や課題を伝えておいて的を絞って吟味・検討を実施することが肝要である。

5. 課題と展望

子どもたちの自己有能感についての聞き取り調査（計3回）では、回を追う毎にクラス全体の子どもたちの有能感の向上がみられ、5歳児クラスの保育の全般的な妥当性と、担任保育士2名及び筆者との連携による暫定的ではあるが、チーム保育の効果そしてその中身である個別対応の充実とプラスのストロークの有効性が明らかになり、保育者の意識的なかかわりと援助の重要性を改めて確認することができた。しかし、保育の質の向上の観点から、「心理臨床において蓄積された知見や技法を用いる」⁵⁾、いわゆる保育臨床という考え方をさらに実証的に保育の現場に活かすのであれば、担任保育士2名に対して事前の研修や学習の機会を保障すること、かつ発達診断や心理的アプローチ等についての共通認識を深めることが必要であったし課題として残った。特に保育におけるプラスのストロークの質については、子ども理解と深く密接に関わる為、今後の一層の研鑽が保育者に求められる課題といえる。

また、乳幼児期における子どもの自我の形成や精神面の成長発達、一般的に保護者、特に母親の影響を強く受ける。それは幼児の自己有能感についても同様であり、従って保護者、とりわけ母親との連携と協力関係が一つのポイントになると考えられ、特に保育園における保育士の子どもに対するかかわりと、家庭での母親のかかわりとの一貫性が大きな課題となる。その為には、子ども

を真ん中にして、園と母親が日常的によく意思疎通を図ることが必要となるが、両者の密接な連携と協力の為のツールであるお便りや連絡帳等の十分な活用が、個別の懇談と併せて求められよう。

エピソードの収集と、その吟味及び考察に関しては、まずエピソード記述の目的との関連について、保育の中での子どもに対する個別のかかわり及び、援助と配慮を子どもの息遣いや保育者の思い等も併せて描き、そのあり方を探る為のものであるとした。そして満たすべき要件の一つである、「エピソード記述は、何よりもその場に生きる人を生き生きと甦らせる作業である」⁶⁾、という点に關しての良否は、あまり確信が持てない。またエピソードと一体になる「メタ観察」⁷⁾(=考察)についても、十分に多元的な意味を今回提示したエピソードから引き出せたかどうかについて、一層の吟味の必要性を強く感じている。このように課題は多いが、しかし、「質的アプローチ」⁸⁾、及び質的心理学に關しての認識と、今後の研究課題についての示唆を深め得ることが出来たことは成果とした。

半構造化面接調査からは、保育士自身の自信なり自己有能感なりが肝要であると、改めて考えさせられた。特にクラス担任の保育士としての成長と、その担任の下で保育を受ける子どもたちの成長発達が行事への取り組みを通して同時に図られ達成できるような行事の在り方について、現場での検討が今一度必要であるといえる。また研究者としての自分が、そのところにどのように関わっていけるかについても今後の課題の一つとした。

今回、同時期(2月下旬)に実施した生活発表会に關するクラス担任保育士(21名)への質問紙調査の中で、「(9)子どもやクラスの成長や変化についてお答えください(今回の取り組みを通して)」と、生活発表会の取り組みの成果について尋ねた項目ではそれぞれ、①クラスのほとんどの子どもが伸びた、成長したと感じる[10名]、②クラスの半数くらいの子が伸びた、成長したと感じる[7名]、③クラスの数人の子が伸びた、成長したと感じる[3名]、④クラスの中のごくわずかの子どもが伸びた成長したと感じる[0名]、⑤ほとんど伸びなかった、変わらなかったと感じる[0名]、⑥よくわからない[1名]、という結果になった。

クラスによっては、子どもやクラス全体の成長や変化をあまり実感できない担任もいて、子どもたちの実態を把握した上での行事の精選や、行事の意義やねらいの設定の検証、また行事の内容等の吟味、並びに検討が必要であることが明らかになったが、同時にそれぞれの担任保育士の研鑽及び、専門性の向上が必要不可欠であることはいうまでもない。

引用文献

- 1) 鯨岡 俊・鯨岡和子著「エピソード記述で保育を描く」ミネルヴァ書房 2009 1 頁
- 2) 西村宣幸著「コミュニケーションスキルが身につくレクチャー&ワークシート」2008 61 頁
- 3) 長谷秀揮著「ごっこ遊び・お話遊び・劇遊びについての一考察」日本保育学会第 63 回大会発表要旨集 2010 622 頁
- 4) 厚生労働省編「保育所保育指針解説書」フレーベル館 2008 182 頁
- 5) 武藤安子・吉川晴美・松永あけみ編著「家庭支援の保育学」建帛社 2010.156 頁
- 6) 鯨岡 俊著「エピソード記述入門」東京大学出版会 2005 158 頁
- 7) 同上 130 頁
- 8) 同上 3 頁

参考文献

- 1) 金田利子・無藤 隆・藤崎真知代・本郷一夫編著「育児・保育現場での発達とその支援」ミネルヴァ書房 2002
- 2) 松村茂治・蘭 千壽他編著「学校心理士の実践 幼稚園・小学校編」北大路書房 2004
- 3) 浜谷直人編著「保育を支援する発達臨床コンサルテーション」ミネルヴァ書房 2002
- 4) やまだようこ編「質的心理学の方法」新曜社 2007
- 5) 根本橋夫著「なぜ自信が持てないのか」PHP 研究所 2007
- 6) 古莊純一著「日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか」光文社 2009
- 7) 藤崎春代・木原久美子「気になる子どもの保育」ミネルヴァ書房 2010
- 8) 柏女靈峰・橋本真紀編著「保育相談支援」ミネルヴァ書房 2011

(2012. 2. 27 受稿, 2012. 2. 28 受理)

**A Study of Preschool education in a Nursery School
About Children's Self Competence**

Hideki Hase

Shijonawate Gakuen Junior College

This purpose of this paper is a consideration of the modalities of care which fosters it, focusing on children subjected to child care, self competence and self competence infant confident foster children inside of the infant. So, understanding that actually preschool and nursery school 5 years old child class with participant observation in actual childcare children cultivate self competence, and deepening the increased can can's involvement and aid and consideration. Collect distinctive in that episode and also conducted interviews about the situation of children. Homeroom 2 nursery in conjunction with further conducted semi-structured interviews, surveys, analysis and discussion. As a result, revealed the importance of a conscious relationship with infant nursery individual situations and aid. Preschool plus stroke enabled by young children also became clear that enhance the self competence of young children.

And each child class most confidence deep independent and ambitious even 5 years old, play live appearance was seen.

Key words: relations of the children's confidence, perceived self competence, nursery, plus strokes